



特67

330

074430-000-5

特67-330

流行歌選 第1号

魁真書楼

M25序

CEI-1682



近來ノ節 廊ノ土産序

昔より今に至りては、俗より代々連代に教はば

會校に校と國と流行と頃を三

頃、俗より代々連代に教はば

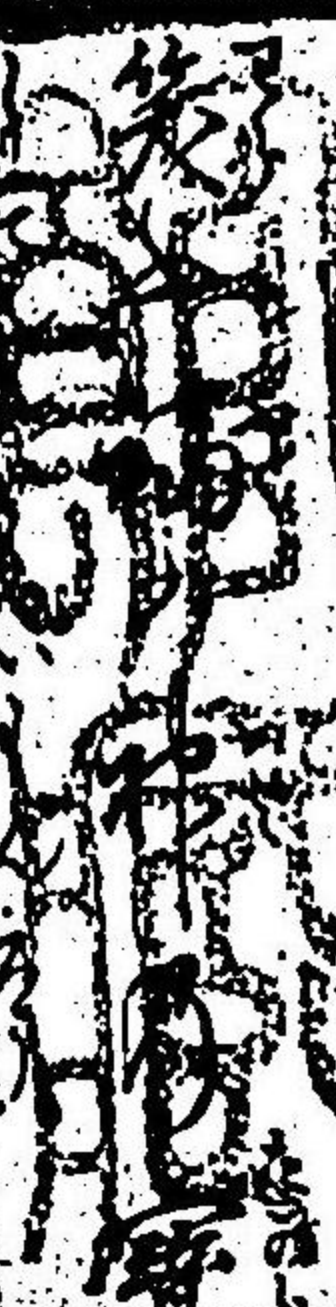
の系の調子とて、標と合せて、女

々、俗より代々連代に教はば

山、俗より代々連代に教はば

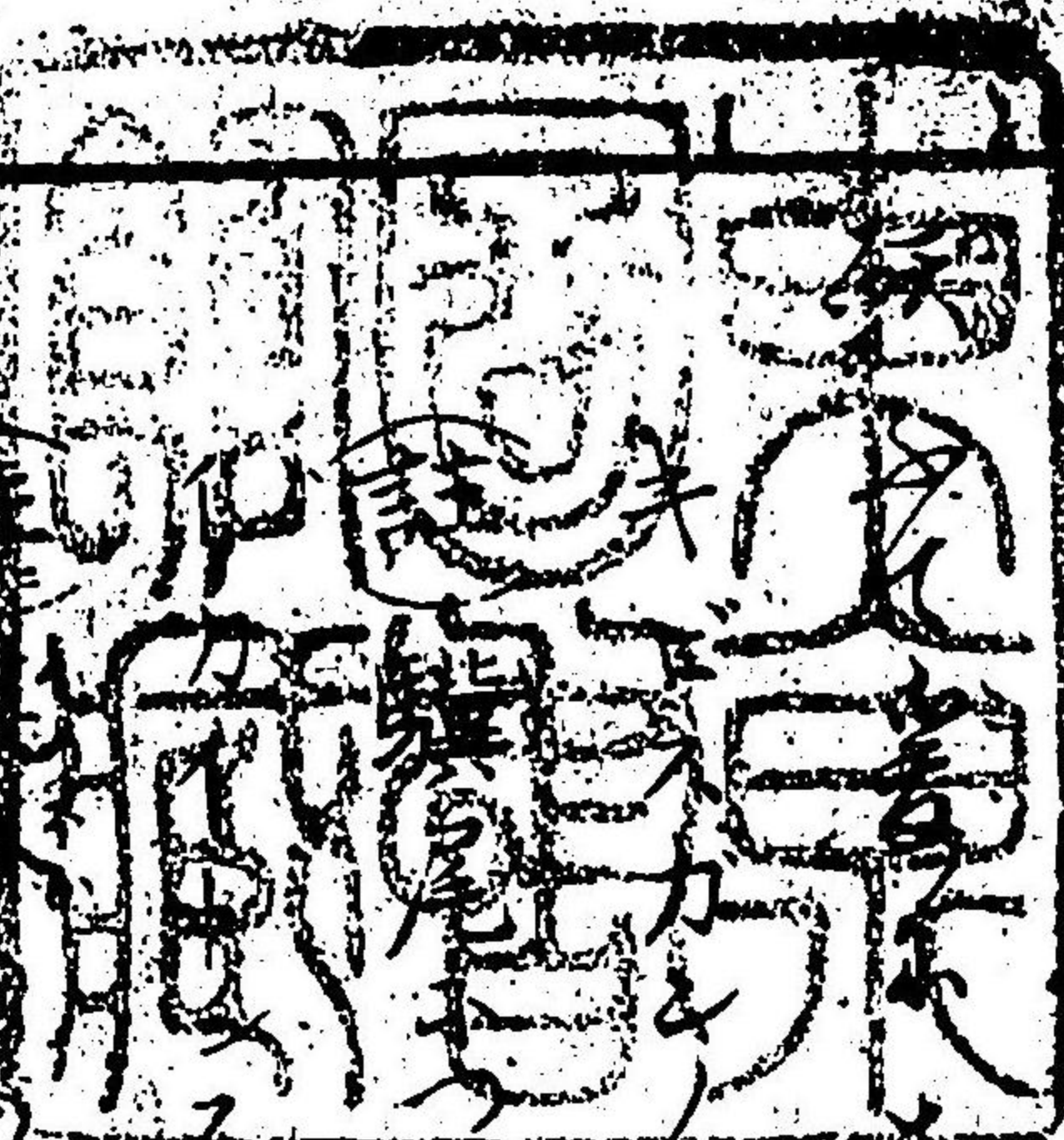
流、俗より代々連代に教はば

致、俗より代々連代に教はば



と亦後之の新版の出る日を待たぬの志み有り陸續と
 影ををきて版元のあふ本の出るにたい書物り毎
 予表題をある者へ繪入雜誌臍志をり笑せ申す
 著者も画工の腕は儲けして所得意様へ所披弘を
 能張心の鼻よりく多分勝手に諸君方に所之を
 後懂下る拜し獨り千拜万拜あり後之を御味
 を乞

明治十五年一月



此頃偏りるキビスガシの証はみるぞんが陳奮深
 むらぬをもうの俗謡と思ひの外大に詔刺ある由にて
 版元の主人がやう先生ふりて唄の解譯志すべしと
 したるあり

(驥尾子奸々)

(以外鈍子)

註 其外のものには皆愚鈍非車

キニギヨクレンソノソクレンホ(金玉連子の即蓮歩)

(註) 貴頭紳士ホエイ偷安春修婦人の如きあり

道末いらふ

浦里の思ひはありと縁も供子
 貴ひは後をたぐりぬ鳥す

キビス。ガシク。イカイ
 ドンス。キンギヨクレンスノ
 スクレンボウ。スチヤマンノ
 カンマンカイノウラビラボウノキンライノ
 あふらしむるをまらんか
 かみさんさつてをまらんか
 さんかまさんか。さふさー。ふらりさん



スチヨシマニクカニマンカイノ(畢竟端々奸慢界)
 (註)畢竟(讀方訛る)此社會、奸佞傲慢輩の奇合あり
 オワペラポーノキンライノ(大篋棒の禁未々)
 (註)未末は斯る風俗は杜絶なきものなり

てぶいち未遊

「あつたをちいイをウふせん

ながむり也三國一の味嚙を

招むる不二の山

キビスガニ
く
奇小合じ



志がくくウロアあ

別き日志たがとふゆ

わく少の待月

キビス
カニ
奇小合じ



てぶいち未遊

百まがあーア、るウ

ふい引か志をくき一

重し俵い ウレシイマンく、キカイ

ヨロシイ、ウチラユツソリ、ソット、スキセンヒキイレ

シユビシテマイバン、ヲフタラウマイナク、以下



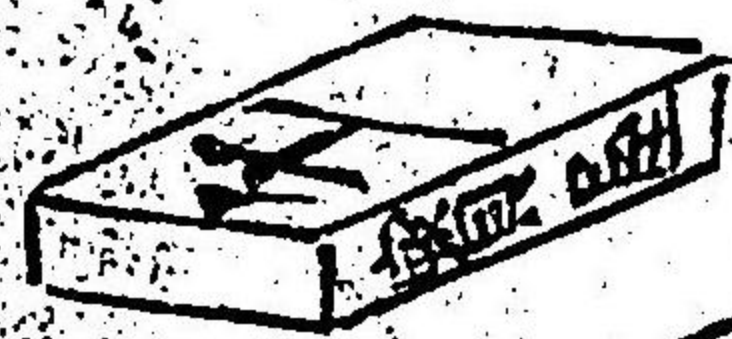
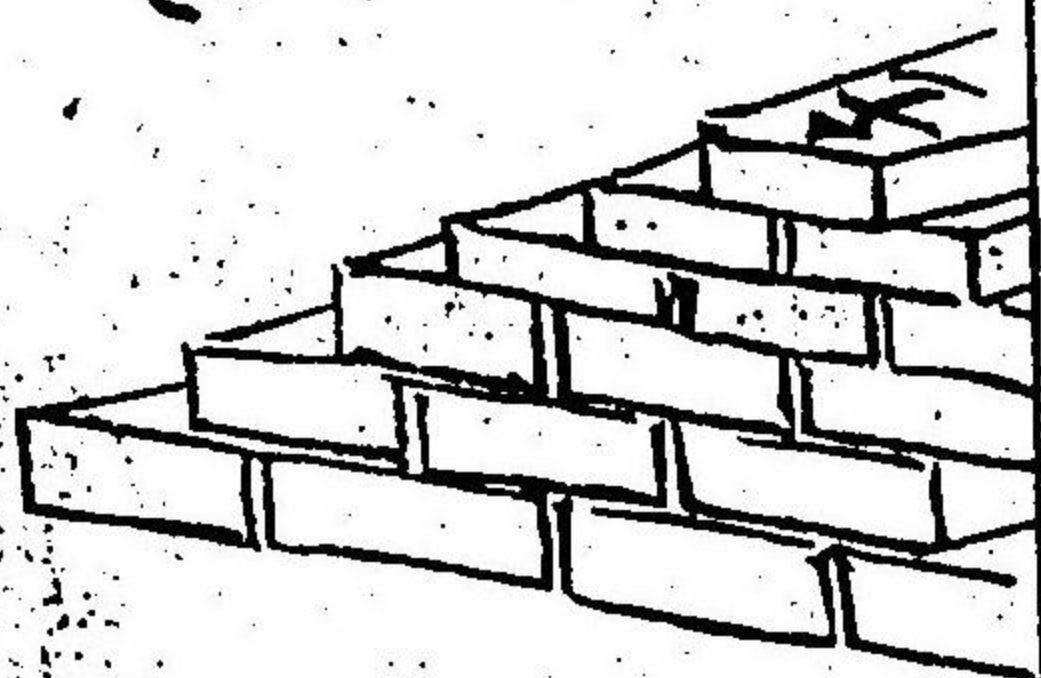
千両箱不二の山

いらぬ実土の土

はせーぬ キビスガニくイガイ

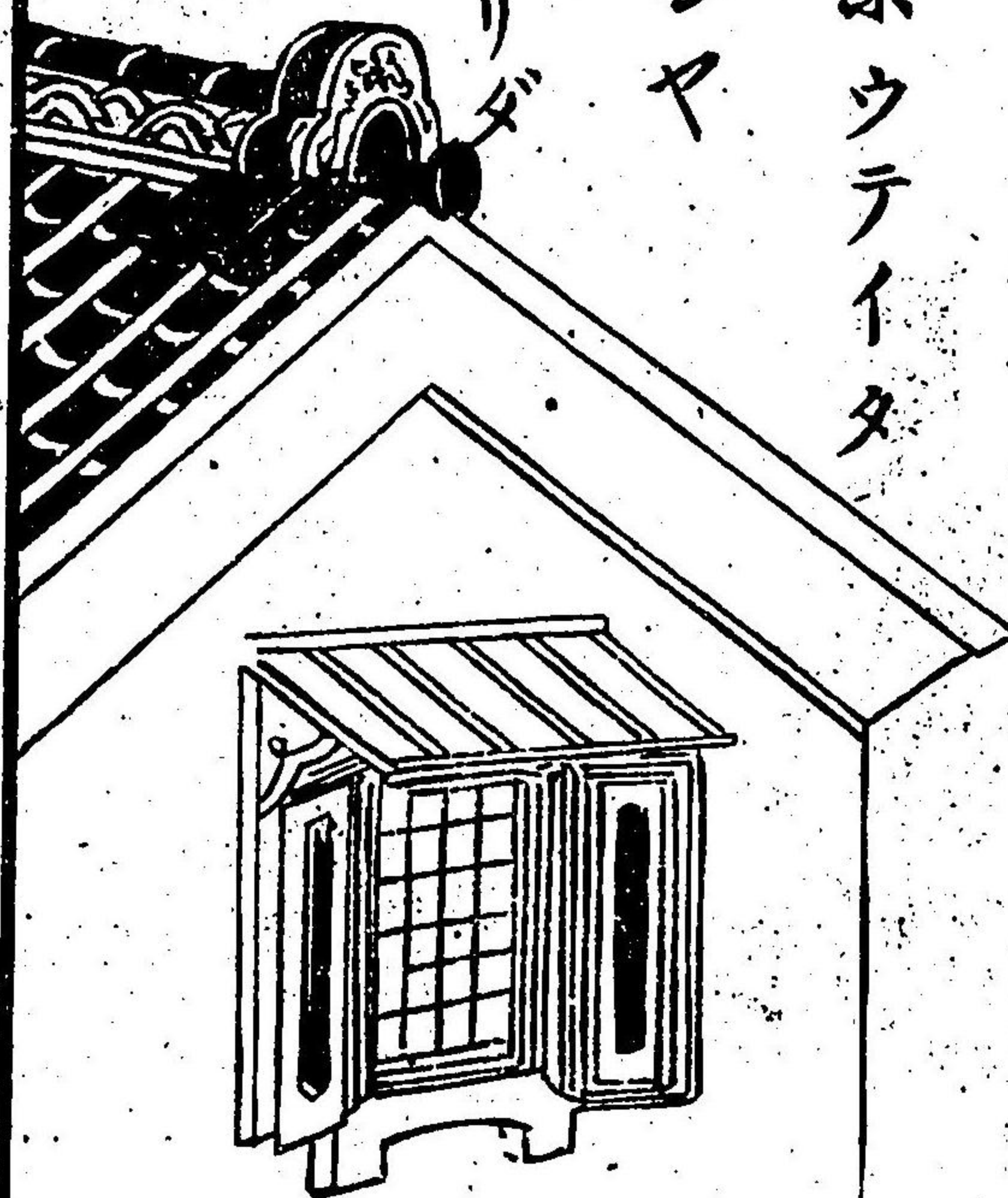
ドンス。金側 顔の時計下

スチヤマンく 金満家の札ピラ切テイライ



迎未いちふ

千両箱不二の山程有たふよかろ
阿の子みうけ志てくらア志たし
三軒百口ふ巻まきツ スチヤマン
キンマンカテ、ヲビラボウテイタ
イ〜 バカラシイシヤ
ヲマヘンカ、ヲーキナヨクブリダ
山下あふおあし



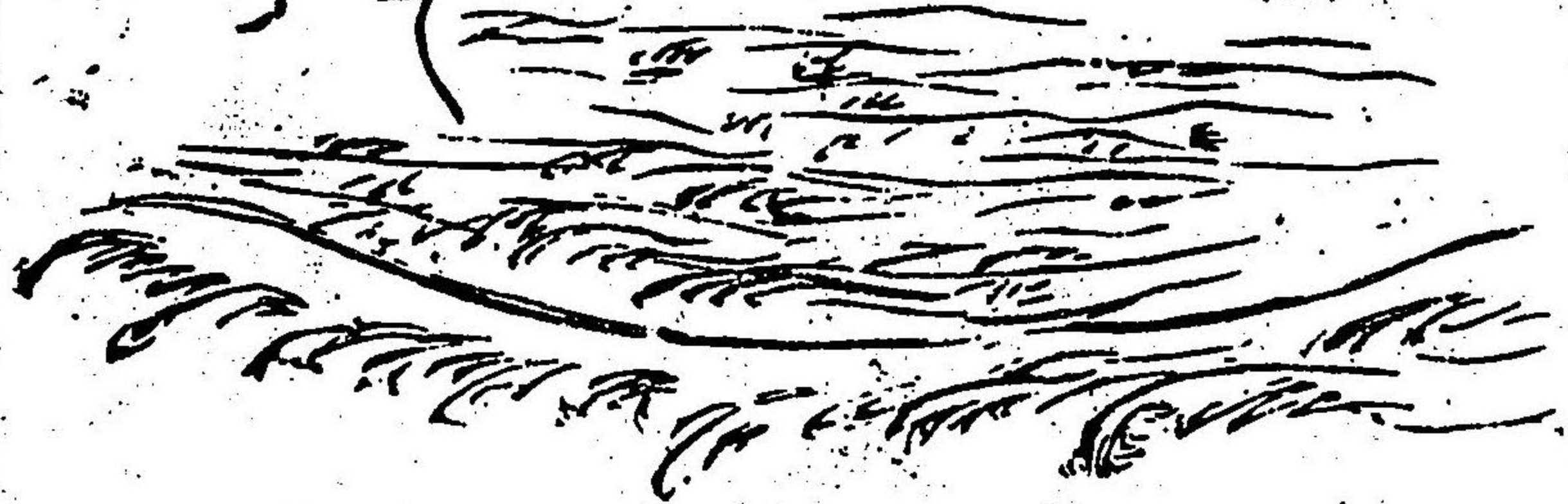
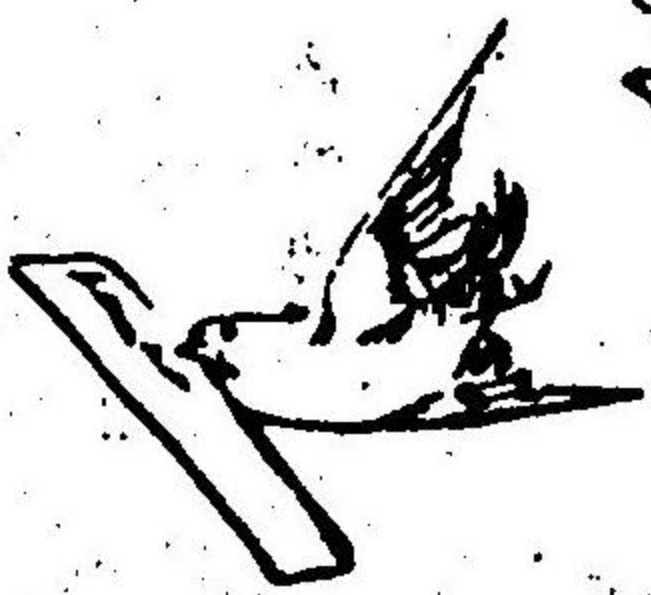
迎未いちふ

魚さ〜 ちとウえあげ
おああめえふも
おましはむたい〜
一ツ魚 二魚 三魚 四魚
スコボコソング、ヨイタ
ホノコ スツテンテレツク
スツチヤンチヤンノヲベラボウノ
ユガイ〜 山下あふおあし



道末のいふ

淡路島へかゝる
千尋の舟おとほけい
はあやしき
なす須戸
の浦
キヒスガコノ。エカイドニス
金玉連スノスケレンボスチヤマ
シジマンカイノヲビラホウノキンダイト
ハトあふおふじし



道末のいふ

手水鉢も書た
箱にふりか
きぬ

イッショケンメニ

スヤランノガマシテ

カチメテ。ユカイ

エライシヤマハ

ウレシイシヤマハ



くんを名

とき小尾谷村子エー六助さんバ子
も音小女房ハ有非か子母が
まだ持ぬヤレく嬉也落ついた
お前の女房ハ和志やぞ
そのまゝ早く金のしした
火吹体と尺八と毎遠いハを
かろ嬉涙のラホイはろくと子



くんを名

新とお家エー将基の駒イ子
花車く逢て香まぐでん。
あまやと桂馬の寄
あまやい新しや
女房角志如もの
金銀つふてくれやるま。
盤の如きハハハハハ
玉手やるやエー



名未を志んく

船と海流が子エーけんかを去たり子ー
 かおめが云るのふやノツペラポウトアガッテ
 のかきうをそまハ口か尻ほか
 こりりかせぬどとふ月自鬼
 有るぢやうと字イ海流を腹を
 立イさふ云ふせ松の目のま
 顔の上ふ花をいしてむぎくと
 けお戻りの日うぶまおたあふノーホーイ
 せー子ー



名未を志んく

貝自を思ふ子エーまかの中て子ー
 大なかいあす情見合ふさか
 貝あす規貝のまて貝多貝
 鮑貝夫を持貝持たぬの貝
 船かいびるうの別らぬかいえきて
 せんしあがりのあま
 何處の大阪かい裁着をこかい
 ノーホーイ走るのかへんあふおあ



くんとを名

今春は及て地獄の刑化して
 燔磨大王が社を建て三津
 の川に汽船の山を
 茶を極で思ふ地獄へ
 電氣燈の池地獄へ
 物を漆釘の山へ茶極へ
 あまたの鬼のは車引郊の河原の
 地蔵尊の供集てノイおぼゆる子

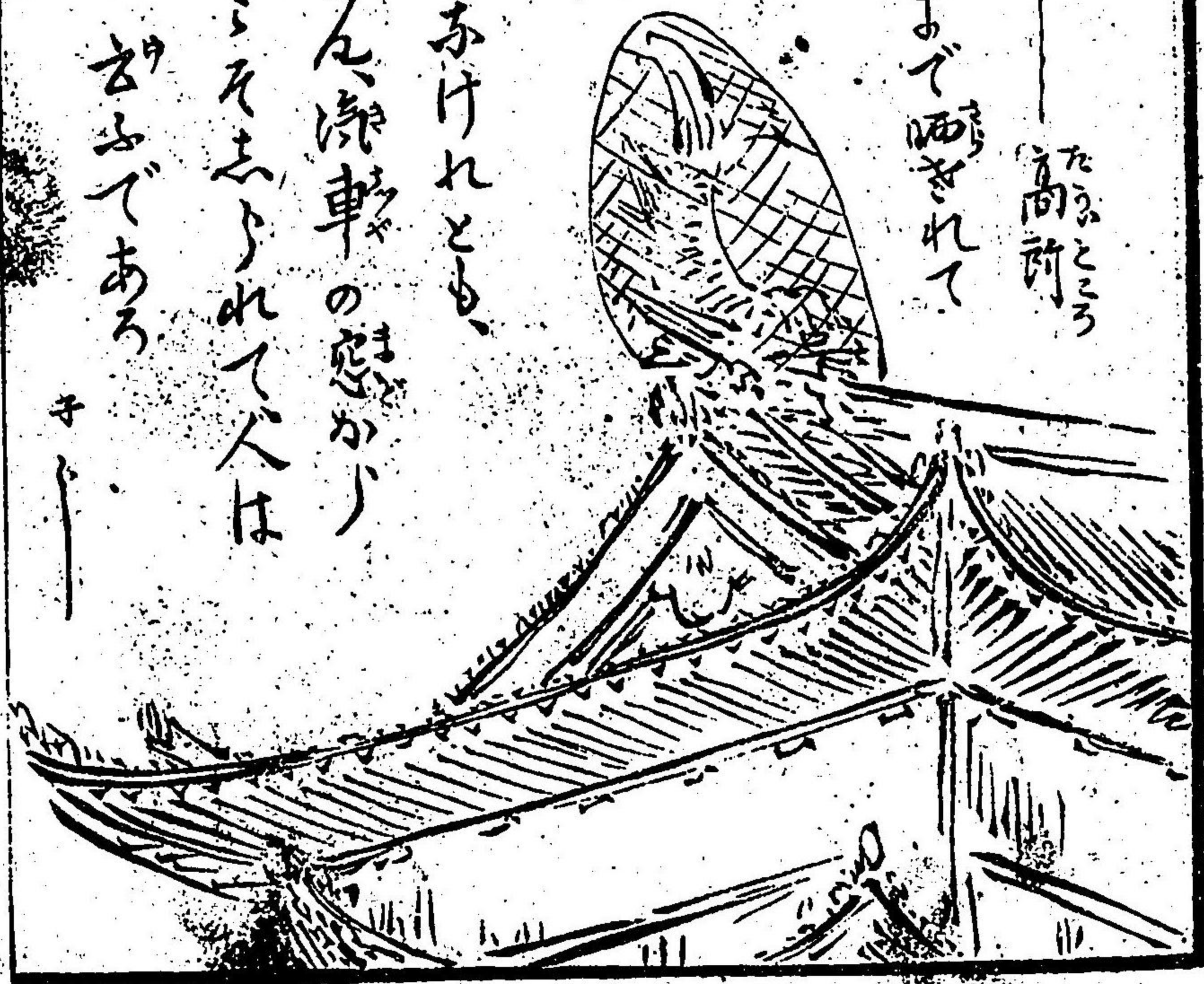
ノイおぼゆる子



くんとを名

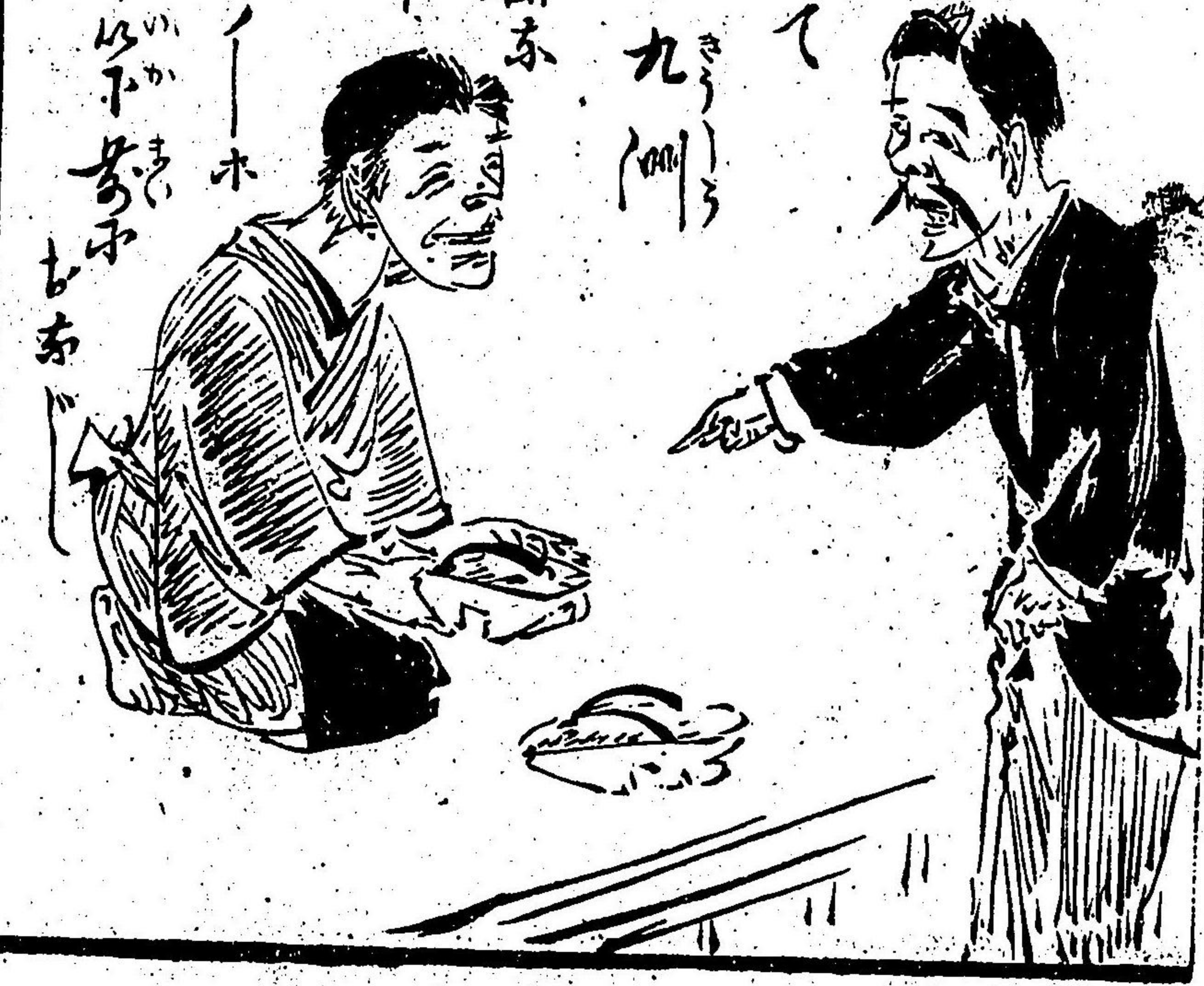
臺の鏡の千一云ふる子
 をおろしてきて博覧会まで運ばれて
 別れの身とあつて又を

一ッあまふつたれどえの
 天子へおときて金細あん
 えきせしれぬ婿脊山へおけれとも
 お目見おろすまゝあんな漆車のおか
 指やれ偽物あんぞとえふれて人は
 志んちうたといふイおふである



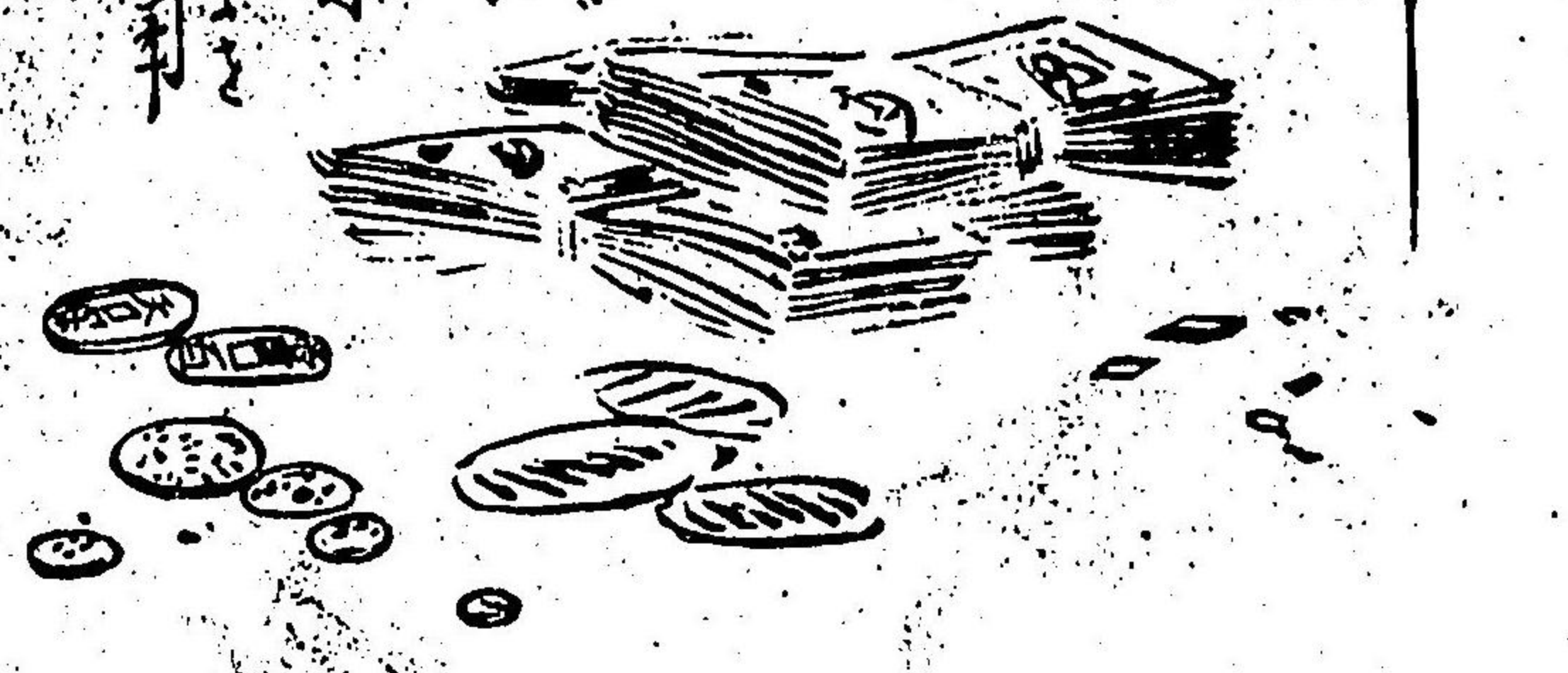
くんとを名

松の隣子子エー九洲下駄
 屋の出来てエー
 そまひ教員買ふ来て
 九洲下駄が有井の九洲
 下駄ハム井台ハ器揃ふ
 桐野のイ鼻緒ハ西郷
 てム井鉄ハコレラ病ゲーホ
 ホイ打たたまふ子子ー
 以下
 小
 小



くんとを名

今度お屋子エー
 井をこはーて四とあー山をく
 づ志イ道とあー馬や馬があ
 あつて馬車や送気や人力車大
 判が判がせあつて角ふ両金ハ
 せき金銀ハ常帯や大鏡や
 天保銭ハ備のり小判ハ何の
 出たか穴あー丸金ウノホイ
 来た子ー
 トコトツコイー
 小

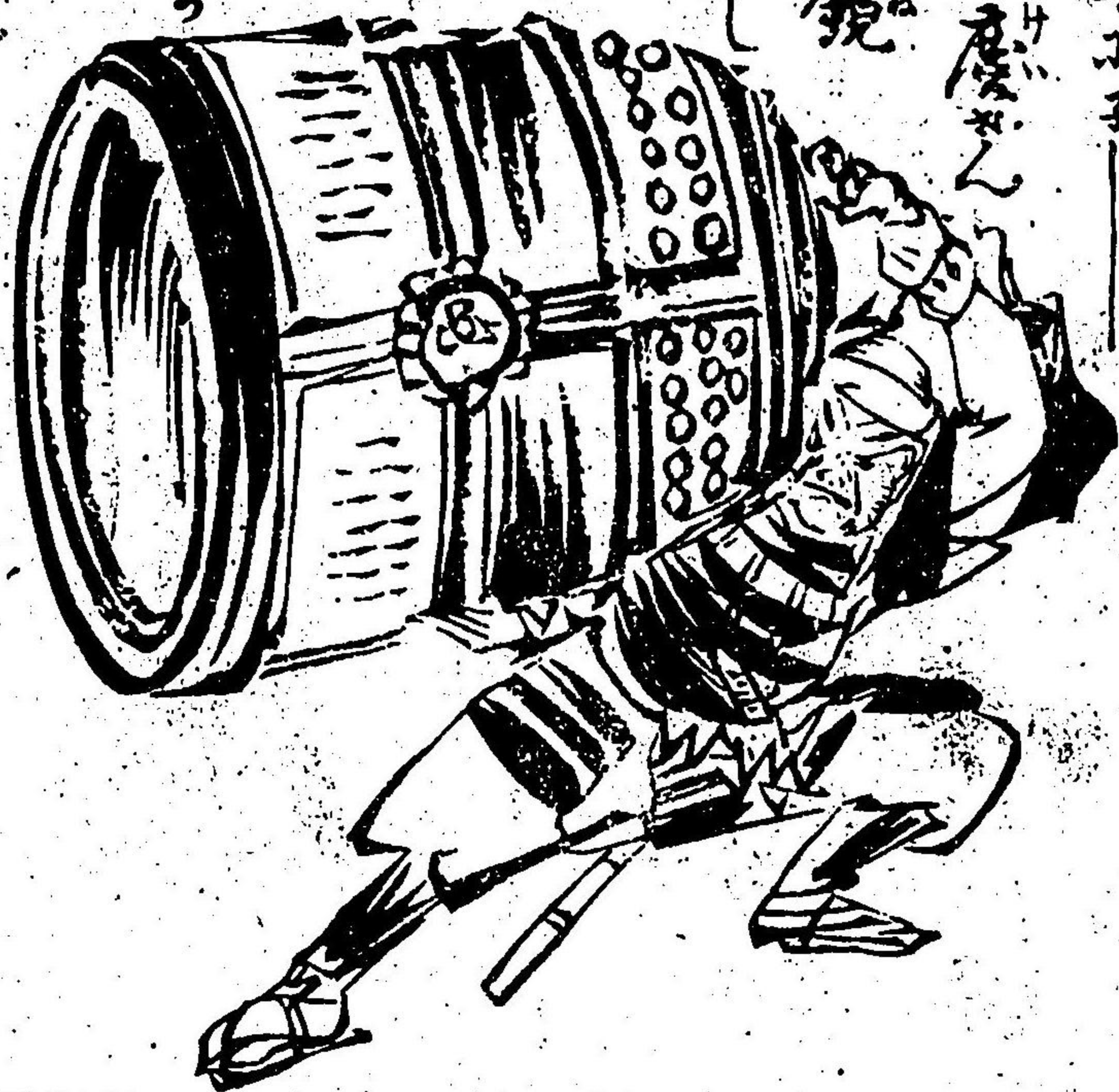


小

くんとお屋大名

若原平の子一軍の時子
 一書つゝのまきお坊の女屋さん
 磨山やまのり大さる鏡
 ひきづりじつぱりふやだし
 て、松木おねの小大へ處へ
 ちよいとやと、除く下
 鐘原大鼓だ、きあせ
 ノホ、イ、六十余洲の兵
 あつまり子

いアおゆま



くんとお屋大名

身もかよはぬ子一ハ文ヶ島へ子
 かよふをまへハよけれども後小
 狩り志書や子ハとふ志て厚
 一、ホ、イ、まくるや子

トコドツコイ



忠義くハ子一まくある中イ子一武士忠義ハ
 大星親子鏡山で、下女お初仙台秋
 ぐ、飯田かをき、守る千松の
 まんまを食ぬが忠義あ、まん年の食ハ、ホ、イ

みふち、子



くんぶを大名

名吉屋名お子エ——真実
 競子——藝者でよいのハ長者町
 料理でおいが競梅で又安
 が宮ふぎで女郎屋でよいの
 が梅本梅菓子屋でよいの
 口屋本屋で安が静観堂
 園町をやはら安相でまんたあいま
 ノホ、イ馬車である子
 い下子子をふと



柳本所

くんぶを大名

奈豆の大佛せんの子エ——云こと
 子エ子エ——せけん
 とれると大おのりか
 母か志すねをも
 君の大相大隊を云成と志れた
 をれがこと威張ちて居申ふ
 えとへ驚か我で来いこれしおま何を
 申ふ大佛あんぞいませぬ
 大佛お金のと懸すノウホイエ
 ニ寸ちか子



柳本所

名お屋志人

あまのまをむしる子エー
 水鉢にみせ灰
 あらうしエー私の心も
 向く申でエそこへお徳を管
 あつくあつたり梅王丸ッホロヨイ
 榊嬢んの桜丸 玉の帰りに
 ノヲホ、イエー 松王丸子



お女子

名お屋志人

よしか分権の子エー 云々笑げざ子エー
 昨日の帯花に今日の夢権的あんぞみ
 ひまををししを髪を剃て改華と、
 國會議員よりまねて、
 つき合入費より迷惑と、
 おまういんぞい買物、
 香煙店住居の氣楽志と、
 一粒の内より越ええの書生で
 ノヲホ、イエー くらすのか子



おお

トロ

名お屋おん

金の志やちはおれ子エ——おふあと

おい文の離他の妻と出た高の金屋を

をろされて東京府へと送られて持参金

おさらされて教多お人子眺められ此う

女夫おまればけりやいつそおんごが

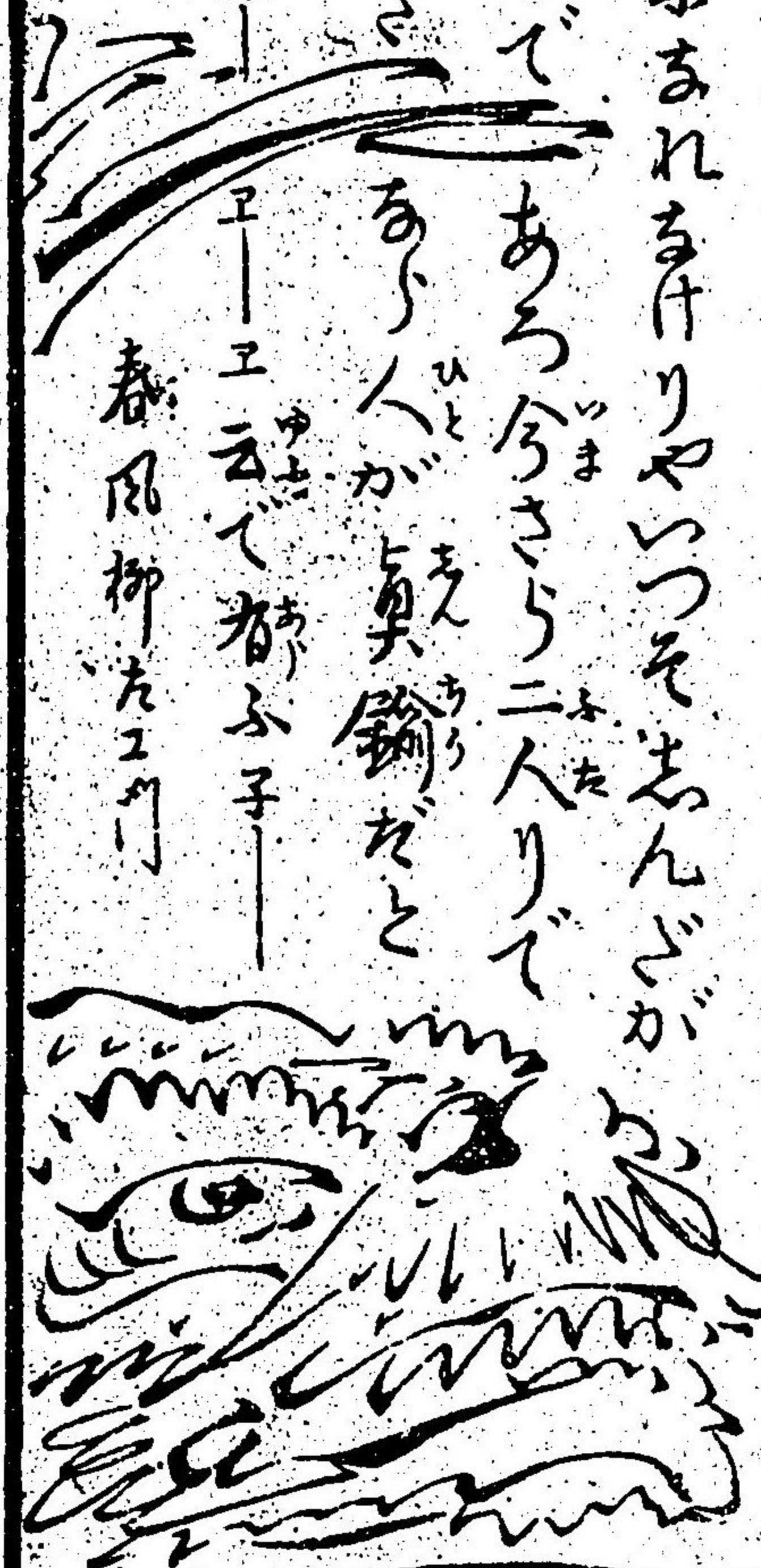
ましであら今さら二人りて

おんご

子—子—

子—子—

子—子—



春風柳たエ門



